

椋山女学園大学研究論集 第49号（社会科学篇）2018

地域連携・映像制作の実践研究

——東山動植物園・開園80年プロジェクト報告——

柊 窪 優 二*

Research Into Collaborations with the Local Community and PR Video Production:
A Report on the Higashiyama Zoo and Botanical Gardens 80th Anniversary Project

Yuji TOCHIKUBO

はじめに

名古屋市の東山動植物園は2017年3月、開園80周年を迎えた。これに合わせ、椋山女学園大学 柊窪研究室ゼミ（文化情報学部メディア情報学科）は、東山動植物園と共同で開園80年の歩みを伝える映像記録（ハイビジョン制作、長さ21分30秒）を制作した。この映像記録はインターネットで動画公開すると共に、東山動植物園（動物会館）などで上映展示された。また新聞・テレビ等のメディアでも広く紹介され、プロジェクトは当初の狙い通りの成果が得られた。こうした地域と大学が連携した映像制作プロジェクトは、ネット動画の広がりや映像機材の低価格化などを背景に、全国的に増加傾向にある。しかしながら映像制作は初心者には難しく、成功例はそれほど多くないようである。そこで本稿では、今回の東山開園80年プロジェクトの内容や映像制作過程を報告した上で、地域連携・映像制作で大学（教員）側に求められる学生指導上の留意点や課題などを考察した。

1. プロジェクトの概要

柊窪研究室ゼミは2008年度から東山動植物園と連携・協力して、動植物園の魅力を発信する映像制作をスタートし、その後も継続している。2012年には文化情報学部松山研究室などと協力してWEBサイト「バーチャルひがしやま動物園&植物園」¹⁾を開設。2013年にはアジアゾウ出産をテーマにしたドキュメンタリー「アジアゾウの出産～東山動植物園～」²⁾を東山と共同で制作し、第55回科学技術映像祭で入賞した。そうした東山動植物園との地域連携を継続するなかで、2016年夏に東山から開園80年を紹介する映像制作の依頼が寄せられた。動植物園からの依頼は、「2017年3月の開園80周年記念事業に合わせ映像を制作してほしい、東山が保管する昔の映像や写真は提供する、映像は東山動植物園

* 文化情報学部 メディア情報学科

(動物会館)で上映展示する」といった内容であった。

教員としては、東山からの制作依頼なので実現させたいと考えた。学生スタッフや日程については、3年ゼミの卒業制作がスタートする時期なので、その課題として制作することが可能であった。ただし映像制作の企画で重要なのは「優れた作品を制作できるか?」という判断である。スタッフが一生懸命に制作しても企画によっては作品として成立しないケースもあるからだ。今回のような開園80年の歩みを伝える作品は、昔の映像資料がないと制作は困難である。そこで詳細を確認したところ、開園当時の非公開動画(東山動植物園が寄贈を受けた8ミリ映像)があり、これとは別に名古屋市が制作した昭和30年代～40年代の映像もあることがわかった。最近の様子は大学側が2008年から継続取材しているので独自に数多く保管している。こうしたことから、この企画は成立すると判断し、東山動植物園と柊窪研究室ゼミとの開園80年映像制作プロジェクトはスタートした。役割分担(表1)と制作日程は下記の通りである。

表1 役割分担 (◎=担当 ○=一部を担当 △=ごく一部を担当 ×=担当なし)

役割分担 \ 担当	東山動植物園 広報担当者+副園長	椋山女学園大学・柊窪研究室 教員+ゼミ学生10人
企画	◎	×
構成・台本作成	△ アドバイス・チェック	◎ 教員中心に作成
出演者	動物園長	リポーター(学生)2人
取材・撮影	△ 撮影時にアテンド	◎ 学生スタッフ10人で実施
映像編集	×	◎ 学生が担当
ナレーション	×	◎ 学生が担当
CG・字幕	×	◎ 学生が担当
音響効果・音声調整	×	◎ 学生が担当
監修	◎	×
最終仕上げ	×	◎
広報	○ 東山80周年で広報	○ 大学広報の視点で発信
作品の公開	◎ 動物会館で上映展示 東山公式サイトで紹介	◎ 東山バーチャルサイトで公開 椋山YouTubeで公開

【制作日程 2016年～2017年】

- ・9月 総合打合せ
- ・10月 台本第1稿を作成→詳細打合せ

- ・ 11月 現地撮影，仮映像第1版を作成 → 内容の打合せ
- ・ 12月 追加撮影，仮映像第2版を作成 → 内容の打合せ
台本第2稿を作成 仮映像第3版を作成 → 監修
- ・ 1月 ナレーション収録，仮完成版を作成 → 監修 → 作品完成
- ・ 2月 完成作品をインターネットで公開
- ・ 3月 東山動植物園で上映展示を開始

2. 映像記録の構成

最初の打合せ・キックオフミーティングを2016年9月に東山動植物園で行った。作品の内容・構成については東山担当者から具体案は示されず，大学側に一任されることになった。作品の長さは動物会館でリピート上映するので，短くても，少し長くても構わないということであった。大学側としては，短い数分の作品では開園80周年の歩みを映像表現できないので，とりあえず15分程度をメドに作業を進めることにした。最終的には21分30秒になった。

こうしたドキュメンタリーは作品タイトルが重要になる。今回のように内容・構成が制作者に一任された場合，企画側と制作側とが作品の方向性をしっかり一致させることが，優れた映像制作の出発点になる。そこで最初に作品タイトルを双方で検討した。大学側から現在進行中の東山動植物園再生計画の目標キーワードを聞いたところ「いのちを未来につなぐ」という，とても良い言葉だった。そこで作品タイトルは「いのちを未来につなぐ～東山動植物園 開園80年」に決めた。「開園80年の歩み」を映像で紹介した上で，「いのちを未来につなぐ」新しい取り組みを伝えることにした。

このあと構成を検討した。今回は大変難しい作品なので，プロデューサーであり指導教員である著者（桒窪）が構成を担当，これを東山と学生スタッフとで相談しながら段階的に修正し，最終的な台本に仕上げることにした。構成のポイントは，「東山開園80年の歩み」と「いのちを未来につなげる」取り組みをしっかりと伝えと共，他のテレビ局等では作れない独自性を大切にしたいと考えた。誰でも制作できる作品なら，大学の研究室ゼミで制作する意義が薄くなるからだ。構成を検討した結果，①資料映像を有効活用する，②過去に大学で制作したアジアゾウとゴリラのドキュメンタリー映像を活用する，③女子学生の視点を表現する，という3点を軸に進めることにした。具体的な構成意図は下記の通りである。

(1) 資料映像を有効活用

東山動植物園から提供された資料映像のなかに昭和12年・開園当時の8ミリ動画があった。これは東山が20数年前にある会社から寄贈を受けたあと，倉庫に保管していた未公開動画だった。開園当時の東山正面広場や園内の様子が撮影されている貴重な映像である。名古屋中心部や名古屋市役所，焼失前の名古屋城，街を行進する兵隊さんの映像もある。そこでこの動画を有効に活用するように構成した。

(2) アジアゾウとゴリラのドキュメンタリー映像を活用

「いのちを未来につなぐ」映像化は、2013年のアジアゾウ出産と、2014年の人工哺育ゴリラ・アニーを群れに戻す成功事例³⁾が良いと考えた。この2つの出来事は、析窪研究室ゼミが東山と共同で映像ドキュメンタリーを制作していた。それぞれ1本の長さが24分程度の長い作品だが、実際に大学側が取材・撮影しているので、当時の状況を詳しく把握していて、映像素材も大学に保管されている。そこでアジアゾウとゴリラについては、当時のドキュメンタリー映像（24分）をそれぞれ3分程度に短くし、今回の作品に使用することにした。

(3) 女子学生の視点を表現する

今回の作品は「東山80年の歩み」と「いのちを未来に伝える」がテーマだが、それをどのような視点で伝えるかが重要になる。今回は女子大学ゼミによる制作なので、学生の視点を大切にし、今日性を意識して構成することにした。具体的には学生リポーターを2人起用し、今と昔の東山動植物園の変化を現場リポートで伝えるようにした。また学生による動物園長インタビューや学生ナレーションを通して、取材者・女子学生からのメッセージを伝えるように構成した。

3. 台本の作成と撮影・編集

構成を検討したあと、教員が仮台本を作成した。それをもとに資料映像を仮編集し、必要な映像を現場で撮影し（写真1）、仮映像にまとめた。その仮映像を東山担当者に見てもらい、必要に応じて修正する作業を何回か繰り返す方法で、撮影・編集を進めた。大学スタジオでの映像編集はプロ用編集ソフトEDIUS Pro 5で行った。ノンリニア編集なので修正は容易にできる。微妙な部分は仮編集したあと必要に応じて修正する形で進め、それと合わせて台本を何度も修正し、最終的には下記の最終台本が完成した。

【いのちを未来につなぐ～東山動植物園 開園80年～】台本（本編＝21分30秒）

【R-1】〈オープニング＋タイトル〉

名古屋市の東山動植物園。昭和12年の開園から80年を迎えました。

東山動植物園は、いのちを未来につないでいます。

・タイトルスーパー

いのちを未来につなぐ
～東山動植物園 開園80年～

【R-2】〈東山動植物園の誕生〉

今から80年前、開園当時の映像です。

〈映像をみせる〉

東山動植物園の前身は大正7年に開園した「名古屋市鶴舞公園付属動物園」です。

施設が手狭になったことから、昭和12年に移転し、3月3日に植物園が、3月24日に動物園が誕生しました。〈昭和12年＝1937年〉植物園には当時、東洋一の水晶宮と呼ばれた大温室がありました。その温室の前館（ぜんかん）は、いまでも同じ場所にあります。現在、国内で残っている最も古い公共温室です。

（リポーター A）

「当時建てられた植物園の温室は、現在、保存のため修理が行われています。国の重要文化財に指定されています。」

開園の翌年、動物園に恐竜像が建設されました。コンクリートでできています。

（リポーター B）

「昭和13年、開園1周年を記念して作られた恐竜像は、ごらんの通り、現在も当時の姿のままです。開園80周年に合わせて、補修されます。」

私たちは近くにある相山女学園大学の学生です。東山の歩みを映像記録にまとめました。

東山は日本の動物園で最も早く、猛獣を柵のない飼育舎で展示（無柵放養式の猛獣展示）する形を取り入れました。昭和16年ころには、動物は1000点を超し、東洋一の規模を誇りました。

【R-3】〈戦時下の東山・ゾウ物語〉

開園からまもなく（昭和12年7月）、日中戦争が勃発。4年後（昭和16年12月）には日本はアメリカとイギリスに宣戦布告。時代の黒い影が東山を包み始めます。

昭和19年から日本本土への空襲がはじまりました。各地の動物園で、軍部から猛獣の処分が求められます。東山でもトラやライオンなどたくさんの動物が処分されました。

昭和20年2月には軍の指示により、閉鎖されました。

こうしたなか、当時の職員は、必死に動物を守りました。しかし、戦争が終わるまでに生き延びた動物は、ゾウ2頭を含むわずか20数点でした。

【R-4】〈昭和20年代～30年代〉

東山動植物園は昭和21年3月に再開しました。再開した年に動物がいなくなったアシカ池です。子供たちが泳いでいます。

戦争が終わり、その時、日本にいる唯一のゾウとなったマカニーとエルドは人気者になりました。全国から子どもたちが、「ゾウ列車」に乗って東山にやってきました。戦後の苦しい時代に、明るい笑顔を呼び起こしました。

（リポート A）

「ここは平成25年に完成したソージアムです。」

戦後、大勢の子どもたちを東山に連れてきた、ゾウ列車のレリーフがあります。」

(リポートB)

「ここには、当時、マカニーとエルドが使っていた道具が展示されています。」

昭和26年、移動動物園が企画されました。絵本でしか見たことがない動物を、子供たちに見せたいという思いからです。

その後、様々な動物が東山に仲間入りしました。カバ夫婦の福子（初代）と重吉（2代目）も、東山の人気を支える「顔」でした。昭和29年に大須から東山まで行われた福子の嫁入りパレードです。トラック11台を連ねた盛大なものでした。福子、重吉夫婦は国内最多の19頭もの子どもを生みました。子どもたちは、全国の動物園に送られ、日本の動物園にいるカバの6割が「重吉」と「福子」の子孫だった時期もありました。

昭和31年ころの映像です。＜当時の映像をBGで見せる＞

【R-5】〈昭和40年代〉

昭和40年代に最も人気を集めたのがゴリラです。当時の飼育員、浅井力三さんです。プッピー、オキ、ゴン太の三頭を、子供にしつけをするようにトレーニングしました。

〈映像・音ON〉「ゴン太とオキとプッピーと」昭和40年制作 名古屋市制作
「動物と生きる飼育員」昭和45年制作 名古屋市制作

【R-6】〈昭和50年代・コアラ〉

昭和59年にコアラがやってきました。2年後には国内で初めてコアラの繁殖に成功。東山の人気者になりました。

それから30年余りが経過しました。コアラは、オーストラリア大陸に1千万頭いたといわれていますが、狩猟や生息環境の変化で、減少しています。国内の動物園でも高齢化にともない、飼育頭数が少なくなっています。東山ではコアラのえさ「ユーカリ」を独自に栽培して、コアラが快適に過ごせる飼育環境を整えています。

【R-7】〈平成へ〉

平成5年に（1993年）、「世界のメダカ館」がオープンしました。ここではニホンメダカが本来生息している田んぼの風景を再現し、そこに生息するメダカや身近な水生生物を展示しています。バックヤードでは、展示するメダカのほかに、絶滅の危機に瀕している様々な種類のメダカを繁殖し、「種の保存」に取り組んでいます。

平成18年（2006年）からは東山動植物園が「人と自然をつなぐ懸け橋」となることを目標として再生プランが始まり、新しい施設が続々とオープンしています。

東山動植物園は、環境教育にも力を入れています。小中学校の校外学習などで活用

できる環境教育プログラムは、合わせて55の受講コースがあり、動物・植物の普及啓発に努めています。

〈映像は4テーマ〉「植物の不思議を知ろう!～食虫植物～」,「カメ・カエル博士」
「クマと人の共存について」,「空飛ぶタネを飛ばそう」

【R-8】〈アジアゾウ誕生物語〉3分

平成25年(2013年),東山で初めてアジアゾウの新しい命が誕生しました。ゾウの赤ちゃん。生まれてすぐに、立ち上がろうとします。

アジアゾウの妊娠がわかったのは、平成24年(2012年)秋。(11月11日撮影)
10歳のメス,「アヌラ」,初めての妊娠です。おなかの中に赤ちゃんがいます。お父さんは,「コサラ」,8歳です。

平成25年,1月29日。午後9時すぎ,破水しました。
陣痛が激しくなり,アヌラは体を鉄の扉にぶつけます。(22時過ぎ)

〈音 ON〉 赤ちゃんが入っている胎膜(たいまく)が出てきました。(22時24分)
〈音 ON〉 出産です。(22時25分)

赤ちゃんは立ち上がろうとします。〈生後1時間〉
赤ちゃんを,お母さんの見えるところに連れてきました。

(出産2日目・1月30日午前2時20分)

アヌラはどういう訳か,反対側の隅の方に行ってしまいました。スタッフは心配します。そのときでした。アヌラが鼻で草を体の上に上げてから,赤ちゃんの方に歩み寄ってきました。赤ちゃんを撫ではじめました。

生まれて3日目。(1月31日)赤ちゃんはお母さんとの同居を始めました。はじめて授乳が確認できました。

生まれて35日目,報道機関に公開です。(飼育室の扉が開きます。)
外の運動場を見ます。アヌラは外に出ますが,子どもが気になって,すぐ戻りました。

〈命名式「さくら」です ON〉

国内で6例目となるアジアゾウの出産。日本人飼育チームで,初めて成功しました。
平成25年には,国内最大級のアジアゾウ舎「ゾージアム」が完成しました。

【R-9】〈ゴリラ物語〉3分

アジアゾウが生まれた年(平成25年・2013年),ニシローランドゴリラの赤ちゃん・アニーが生まれました。母親のアイは,お乳をうまくやれませんでした。このままでは弱って死んでしまう恐れがあったので,飼育員さんが育てることにしました。

しかし大きな問題がありました。このままだと,アニーは自分がゴリラだということとを認識できず,2度と群れに戻れなくなってしまうのです。

アニーを群れに戻す飼育計画の第一歩は、飼育員さんがゴリラのお母さんといった感じで接することです。世話をする飼育員さんを、最初の1ヵ月は3人に限定し、アニーが受けるストレスを少なくしました。

生後12日目から、仲間の姿に慣れるために、アニーを格子越しに他のゴリラと対面させました。

〈H25（2013）年12月27日〉

生まれて半年が経過、アニーは檻（おり）の一番高いところまで登っています。

〈生まれて1年が経過 H26・2014年〉

アニーが母親のアイと同居するようになりました。（6月14日）

アニーがお母さんに近づきます、……わが子を手で払いのけます。

〈Replay映像〉しかし……、すぐに抱き寄せました。

アニーは1歳5ヵ月になりました。

父親のシャバーニと、異母兄弟のキヨマサ、その母親のネネが加わり、5頭すべての同居を始めました。キヨマサはアニーより7ヵ月年上の遊びたい盛りです。アニーに何度もちょっかいを出します。

同居の初日、事件は起きました。逃げるアニーを追いかけます。そのとき、アニーが落ちました。見かねたシャバーニが、間に入りました。

キヨマサがアニーの大事なタオルを引っ張ります。そのときでした。

〈Replay映像〉

アニーが反撃する構えを見せたところ、ネネは息子がいじめられると思ってアニーを突き飛ばしました。そのときシャバーニが隣りの部屋から駆け付け、アニーを守ったのです。

〈H27・2015年5月〉

国内で初めて、人工哺育で育てたゴリラを群れに戻すのに成功しました。東山ではゴリラ5頭が野生と同じ群れで暮らしています。現在は新しいゴリラ・チンパンジー舎、「アフリカの森」の建設が進んでいます。

【R-10】〈温室植物の保存〉

植物園にある保管温室です。

（リポーター A）

「ここでは、開園当時から温室に植えられていた植物を移植保存しています。」

これらの植物は、国の需要文化財の温室前館を保存する工事が始まる前にここに移されました。東山の開園当時から温室とともに試練を乗り越えてきた大切な植物です。

(リポーター B)

「こちらは昭和12年から植えられているシンノウヤシです。保存修理が終わったあと、温室前館に戻されます」

【R-11】〈まとめ・エンディング〉

東山動植物園は平成29年（2017年）で開園80周年を迎えました。

戦争中、アジアゾウを守り抜いた東山動植物園。ここで今までたくさんの命が誕生しています。

昭和40年代に人気を集めたのがゴリラ。キョマサとアニーが誕生し、ゴリラ5頭が野生と同じ群れで暮らしています。

東山動植物園は再生プランに取り組んでいます。「人と自然をつなぐ懸け橋（かけはし）」に生まれ変わろうとしています。

〈リポーター 2人〉 Q「これから未来に向けてめざしていることは何ですか？」

〈動物園長 黒邊雅実さん〉 A「答える 15～20秒 」

開園80周年を迎えた東山動植物園、これからのいのちを未来につないでいきます。

・スタッフロール / 企画 名古屋市東山動植物園 制作 梶山女学園大学 桁窪研究室

・エンドタイトル

4. 学生指導の留意点

教員が学生を指導するとき、①学生の出来ることを的確に判断する、②学生の可能性を広げて育てる、③グループ制作をコーディネートする、④東山担当者との連絡・調整を円滑に行う、⑤制作者として正しい判断をする、という5つの視点を大切にしたい。

(1) 学生の出来ることを的確に判断

映像制作は専門性が高い領域である。特に今回のように公共の場所での公開を前提にした作品は制作者の力量や責任が問われる。制作過程で、学生にできる作業もあれば、当然できないこともある。できないことを学生にやらせようとする、プロジェクト全体が崩壊する可能性がある。したがって学生ができないことは、教員が見本を示す形で実行することが求められる。教員にとっては、手を出し過ぎると学生の自主性が損なわれる恐れが



写真1 東山動植物園での撮影風景

あり、難しい判断でもある。今回の場合は構成・台本作成はそうした視点で教員が担当した。現場でも難しい撮影は教員が見本を示す形でカメラ撮影をした。

(2) 学生の可能性を広げて育てる

映像制作には様々な作業工程があるが、経験が少ない学生でも、若い女性という感性を生かして的確にできる領域もある。今回は、音楽・選曲、タイトルCG作成、ナレーションはとても良くできた。担当の学生は自分の可能性を広げ、大きく成長できたと思う。教員としては、そうした作業は学生の意見や提案をできる限り尊重し、学生の自主性を大切にして、クリエイティブな思いを育てる方針で指導した。

(3) グループ制作をコーディネート

今回の作品は3年ゼミ＝10人と教員との共同制作である。ただし3年ゼミは、この作品以外に名古屋市広報映像や東山シリーズ映像など計6本もの作品を制作していた。このため学生10人全員が平等に東山80年映像に参加した訳ではない。現場撮影にしか参加しない学生も多い。したがってディレクター担当の学生を中心に、教員も含め全員で、チェックポイントごとに映像を確認し、意見交換して、修正を行うなど、グループ制作を上手くコーディネートする必要がある。これは東山以外のゼミ映像制作でも共通することである。

(4) 東山担当者との連絡・調整

地域連携による共同制作は連携先との連絡・調整が重要になる。教育効果も考え、学生に直接、連携先の担当者との連絡・調整させることもある。連携先の担当者は学生に対して丁寧に対応してくれるケースが多い。ただし今回は長さ20分を超える映像記録を短期間に制作するのでその余裕はなかった。このため教員が東山との連絡・調整を進めた。その

進め方は、テレビ局や制作会社がクライアントと行うような密度の濃い内容だった。東山の担当者がしっかり対応してくれたことが、優れた作品を制作する原動力になった。連携先との連絡・調整は、プロジェクトの状況に応じて教員が的確に判断することが求められる。

(5) 制作者として正しい判断

こうしたプロジェクトは制作作業が予定通り進んでも、学生への指導が上手くできても、優れた作品が完成できないと結果的には失敗になる。こうなると学生への教育効果も低下してしまう。したがって教員は企画、構成、台本、撮影、編集など全工程を通して、優れた作品を完成させる方向で、学生スタッフを牽引することが求められる。なかでも企画段階の判断が重要で、その段階で良い作品が作れる見通しが得られなければ、プロジェクトを中止することも必要だ。今回は難しい内容だったが、昔の資料映像と、過去のドキュメンタリー映像があり、「いのちを未来につなぐ」というキーワードが出たことが、「優れた作品を制作できる」という制作者の判断を支える大きな材料になった。

5. 完成作品の活用・発信

映像記録「いのちを未来につなぐ～東山動植物園 開園80年」(本編＝21分30秒)⁴⁾は2017年1月に完成した。完成作品は当初の計画通り、インターネットで動画公開し、東山動植物園などで上映展示された。またテレビ放送を希望するケーブルテレビ局2社には、番組素材として無償で提供した。作品の活用・発信は下記の通りである。

【インターネット動画公開】

- ・バーチャルひがしやの動物園&植物園サイト (ピックアップ)
- ・東山動植物園公式サイト (80th特設サイト/園内マップ)
- ・名古屋市公式動画サイト (なごや動画館「まるはっちゅーぶ」1chナゴヤの魅力)
- ・椋山女学園大学 YouTube サイト (地域連携/ドキュメンタリー)

【上映展示】

- ・東山動植物園 (動物会館) 開園時間中に映像をリピート上映 2017年3月～
- ・科学技術週間記念講演会&上映会 名古屋市科学館ホール 2017年4月22日

【テレビ放送】

- ・愛知県一宮市のケーブルテレビ「アイ・シー・シー (ICC)」
2017年4/1日 (土) ～ 15日 (土)
月 14:30 火 18:30 水 21:30 木 13:00 金 15:30 土 8:00 日 11:00
☆再放送 2017年10月 (月 18:00 火 20:30 水 08:00 木 10:30 金 14:00)
- ・愛知県稲沢市のケーブルテレビ「稲沢シーエーティーヴィ」
2017年4月2日・30日 13:00 4月16日・23日 19:00



写真2 東山動植物園（動物会館）での映像上映（制作した学生）

6. まとめ

企画に沿った映像作品を予定の期日まで作り上げ、映像を広く公開・活用できたので、大学・東山動植物園の双方ともプロジェクトは成功だったと受け止めている。教員としては映像を無理なく構成でき、貴重な昔の動画や独自取材映像を入れたことで、テレビ局にも負けない優れたドキュメンタリーになったと思っている。これは制作に取り組んだゼミ学生やアドバイスしてくれた東山担当者の熱意によるところが大きい。作品を完成・公開した2017年1月～3月にかけて、中日新聞、毎日新聞、朝日新聞、読売新聞が「梶山学生の東山映像制作」として新聞記事を掲載してくれたほか、中部日本放送CBCと東海テレビがテレビニュースで取り上げてくれた。大学ゼミの活動が新聞・テレビで大きく報道されたのは異例のことだった。メディア報道が相次いだ背景には、完成映像のクォリティが高く、映像をネットで視聴した記者に学生の思いが伝わったことが大きいと思う。教員としては、梶山・析窪ゼミでしか制作できない優れた作品になったと思っている。作品は2017年9月に名古屋で開催された「あいち国際女性映画祭2017」と同年11月に大阪で開催された「地方の時代・映像祭2017」に出品した。

地域と大学が連携して映像を制作・発信する取り組みは全国的にも増えている。映像はインターネットで広く発信でき、社会への影響力が大きく、地域の振興や活性化に貢献できるからである。大学にとってもメディア教育の実践フィールドに活用し、学生教育にフィードバックできる。しかしながら全国的にはプロジェクトが上手く進むケースは意外に少なく、成功例は多くはないようだ。その理由は、映像制作は専門性が高く、学生にクォリティの高い映像制作を的確に指導できる教員が少ないからである。こうしたプロジェクトは成果物が映像で、学術論文や報告書等とは違い、誰が見ても良し悪しが判断できる。ある意味では「本物勝負」の厳しい世界でもある。教員にとっては高度な映像制作能力と

学生指導力が求められる。テレビ現場のディレクターより難しいスキルが求められるとも言える。本学メディア情報学科では日常的に、こうした複数の地域連携プロジェクトに取り組んでいる。今後も地域と連携・協力して教育内容を充実すると共に、こうした優れた取り組みを将来につなげる教育システムの構築が求められる。

参考文献等

- 1) WEBサイト「バーチャルひがしやま動物園&植物園」
<http://www.ci.sugiyama-u.ac.jp/vhzbq/index.html>
- 2) ドキュメンタリー「アジアゾウの出産～東山動植物園～」
<https://youtu.be/080RLcQONag>
- 3) ドキュメンタリー「人工哺育アニーを群れに～東山・ゴリラ飼育日誌～」
<https://youtu.be/FnrhSMFsdRE>
- 4) 映像記録「いのちを未来につなぐ～東山動植物園 開園80年」
<https://youtu.be/0BZNNLZNNtQ>